

相撲の弓取式は何のためにやるの？

2014年 1月22日

弓取式(ゆみとりしき)とは大相撲の本場所で結びの一番の勝者に代わり、作法を心得た力士が土俵上で弓を受け、**勝者の舞を演ずる**ことである。

全取組終了後、打ち出し前に行われる。



今日の原型は1791年7月11日(寛政3年6月11日)に横綱である2代谷風梶之助が徳川家斉の上覧相撲で、土俵上で弓を受け「敬い奉げて四方に振り回した」ときにできあがったとされている。

本来は三役揃い踏みに大関として登場した2人のうちの勝者が行っていたが千秋楽に幕内の取組がなくなり、幕下力士が行うようになった。なお明治以降に幕内力士が弓取を行った記録も数例存在する。

元々は千秋楽にのみ行われ、この場所最後の勝者を称えてのものだった。そのため千秋楽結びの一番が引分や痛み分けの場合は中止された。1952年5月場所からは、毎日行われるようになった。千秋楽で幕内の優勝決定戦が行われるときは決定戦を行う前に弓取式を行う。

弓取を行う力士は向正面に控えとして座り、結びの一番で東が勝てば東から、西が勝てば西から土俵に上がり弓を振り、四股を踏む。

なお控え席には何も敷いておらず、基本的に地べたに座る(関取が弓取を行う場合は座布団が用意されている)。

弓取を行う力士は原則として幕下力士であるが特別に大銀杏を結び、化粧廻し(協会所有のものを使用、3月場所は東西会所有のものを使用)を締めて土俵に上がる。

基本的に横綱がいる部屋の力士によって行われ、横綱不在の場合は大関のいる部屋から選出される。